

## 断

## 想

服 部 晶 夫 (数学教室)

退職する3月31日があと一月餘りに迫っているというのに、雑務に追われ忙しい毎日を送っている。仕事の内容は今年の夏に予定されている国際数学会議の準備と日本数学会の行政面に関することとの二つで、どちらも誰かが引き受けなければ成り立たないという意味ではやむを得ないものではあるが、この期に及んでこちらにお鉢が廻ってくるのはいささか割が合わないというのが卒直な感想である。さすがに最近では教室や学部の雑用からは免除されているが、一年前には全学の大学院学生委員会の委員長の時に前の天皇の死去とぶつかりずいぶん神経を使うはめになった。

われわれの世代が若かった頃には科学者で随筆を書く人がかなり多かったように思う。寺田寅彦や中谷宇吉郎のようにたいへん達筆の人もいた一方、それ程のこともない人も多かった。いずれにせよ、最近では科学者の随筆はとんと見受けられないようになった。おそらく昔の人は今のわれわれよりはるかに暇だったのだろう。少くとも、精神的ゆとりにおいては格段の差があったのではなからうか。専門の細分化が進み、研究の進展のスピードも増した現代の研究者にとって不断の切迫感が心のゆとりを奪っていると思われる。まして、日本では様々な雑用が研究までおびやかしている。

理学部でも、この数年毎年のように、停年教授のうち何人かが最後の挨拶で雑用の多いことを問題にしていたと記憶する。雑用の流す毒については、殆どすべての人がその苦さを知り悩まされ続けているのだろうが、事態が良くなる兆は見えてこない。最近つくづく思うのだが、日本の大学における教授会制度が時代の流れに乗りきれず、次第に形式的な面、非効率な面が露呈し、時には障碍にさえなっているのではなからうか。おそ

らく、教授会制度の主な意味あいには、大学の自治を守るとか、人事の独立性や厳正を保つための、いわば歯止めとしての役割にあるものと考えられる。しかしそのような役割を真に発揮する状況は稀にしか起らないのが現実であり、実際にはみんな相談してみんなで決めようというスローガンが幅を利かし、評議員会を筆頭に、教授会、各種委員会、懇談会とありとあらゆる場所で、ありとあらゆる時に会議が開かれている感がある。たいていの場合、会議を経なくても同じような結論になりそうだが、会議を開いたという名目でみんなが納得する、あるいは納得させられる仕組である。東大でも、かつて、共通一次試験への参加や、入試の分離分割実施についてみんな相談したときには、おそらく反対意見の方がはるかに強かったと推察するが、結論は始めから決っていたようなもので、後味の悪いことがおびただしい。これなどは極端な例であるが、会議で無駄に費されるエネルギーの量は計り知れないものである。このような無駄が起るのは、みんな相談してみんなで決めようという姿勢に根本的に無理があるからだろう。雑用を減らすために、委員会の数を減らしたり、委員数を縮小しろという意見はよく聞くが、教授会制度そのものに言及した意見はあまり聞かない。大学にもタブーはあるが、教授会制度もその一つなのだろうか。そのあたりを一度洗い直し、相当思いきった手直しをしないと事態はますます悪化するばかりだろう。

教授会制度とともに日本の大学において根幹となっているのは学部制度であろう。外国からわれわれのところにくる郵便は単に Department of Mathematics とか Mathematical Institute という所属を明示してあるだけだが、こちらからはそ

の次に Faculty of Science とつける習慣である。また、国内でも理学部数学教室と書く。このことは、外国では学部よりも学科が実質的な運営の中心であり、しかも一つの大学の中には一専門は一学科に統一されていることを示している。一つの大学の別の学部に属する同一専門学科同志で仲が悪いところの噂をきくこともある。合同すれば強力な研究集団となり得るはずのところを、まことに味気ないことである。自分自身についていえば、理学部内の他の学科の人事より教養学部の数学教室の人事にもつ関心の方がはるかに大きかった。両方の教室が大学院ではつながっているという現実の下では、それは単なる好奇心以上の強い関心事であったのである。このような点にも、学部別に教授会がことを司るという制度の矛盾が潜んでいると常日頃感じている。

東大紛争以後20年、結局東大では何も変わらなかったとよくいわれる。国会が議員定数は正を自分の手では断行できず、役所は自分の権限を弱めるような行政改革をやる気はない。大学も自分の力

で自分を動かすことはできないのだろうか。国会や役所と違って、こちらは変革によって失うところが少い筈ではあるのだが。

停年退職教官としての恒例の文章を書くよういわれて、どうせ下手な随筆のようなものを書くのなら、ふだん感じてながらあまり話したことはなかったことを書きとめておくのも意味があるだろうと思った。共鳴を得られる部分も案外あるのではないかとひそかに考えている。

理学部数学教室に籍を置いてから20数年が過ぎた。毎年のように優れた研究者が輩出し、清新な感覚の彼等と同じ感覚で対応して行かなければならないという意味でまことに厳しい職場ではあったが、それはそれでやり甲斐があり愉快でさえあった。その点については、悔の残ることも多いけれども、ある爽快感をもって去ることができる。

数学教室はいうに及ばず、理学部全体の同僚や後輩の方たち、また事務関係の方たちにもたいへんお世話になった。筆をおくに当って心から謝意を表したい。

## 東京大学理学部1988年発表論文リスト

和田 昭 允

上記の業績リストを作り、教室全員の方にお見せ下さいという手紙をつけて各教室主任宛にお届けしてありますので御覧下さい。その理由は、当理学部のような高度の研究者集団は、そこで行われている全研究の一覧が出来るようなメディアを持つべきだし、また、理学部の一体性から見ても、お互いの研究を知るきっかけになればと考えたからです。さらに、有馬総長が、総長室に各学部の業績を評価できるような有力なデータを置いておきたいと希望されたことが、リスト作成の強い動機となっています。

このリストは、教授会および教室主任・施設長会議で御相談し、最初だからあまり固苦しいフォーマットを決めないでとにかく作って見ようという大方の御意見を入れて、各教室の責任で作られたリストを私がまとめたものです。記載もれや誤植などありましたら、教室ごとにまとめて私にお知らせ下さい。正誤表を作るなどの措置を取ります。

今後、これが毎年の理学部の定期的な出版物となり、このすぐれた頭脳集団の活動を世の中により広く知ってもらうために役に立てばと切に希望する次第です。